

三、熱河肅清戦と第二遣外艦隊の協力

滿洲國を承認せる我が帝國はその全版圖に互る治安の維持一日も早からんことを希ひたりしに昭和八年（大同元年）一九二三年初頭滿洲國は我が關東軍の指導下に熱河省内に雲集蟠居せる匪賊偽勇軍等を清掃して以て王道政治の神髓を國內に布き且國內擾亂の根絶を期せんとした。

二月二十三日帝國政府は豫め南京政府に對し、日本軍は日滿議定書に照らし滿洲國を協助し以て反滿軍を肅清すべきに依り、中國軍隊にして我が軍隊に敵對し延いて戦亂華北に及ぶが如きことあらば其の責任全く中國にあるべき旨を警告するところがあつた。

二月二十一日先づ北票を占領せる第八師團の進出により

肅清軍事  
行動開始

2997

緒を開いた熱河肅清戦は翌二十二日より全面的に展開せられた。

第六師團は通遼、彰武方面より赤峰へ、第八師團は朝陽寺、錦州より承德へ、第十三及第十四混成旅團は緩中より長城（冷口界嶺口）へそれぞれ勇猛果敢なる攻撃前進を開始した。

各部隊は無人の曠野を行くが如く所任の敵を繼逐粉碎しつつ前進し三月二日には赤峰に、三月四日には承德に入城し、更に進んで三月十日長城の線を占領した。

列國の情勢

其の間壽府に於ける空氣は日本對國際聯盟の正面衝突直後であつて、世界の視線は盡く我が國の行動に集中せられ、列國は異常の關心を以て熱河肅清戦の成行を注視し

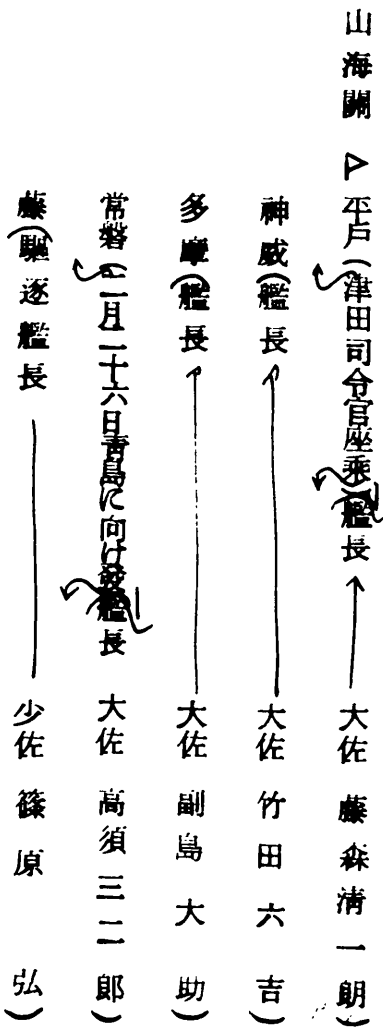
つつあつた、<sup>此</sup>其の機會を利用し民國政府は必死の宣傳を行ひ、聲を大にして日本は遂に華北をも併呑せんとすと爲し、日本は世界平和の破壊者、侵略者にして第二の世界大戦を惹起するの危機目前に迫れりと絶叫して以て列國の同情と干渉とを獲んことを企圖した。

之に對し日滿兩國は其の立場を明示する爲今回の行動は熱河省内の叛軍を掃蕩するのみにて他意あらざる旨中外に宣するところがあつたが、支那側は却つて右日滿兩國の宣言を以て日本軍は長城以南地區に進出するの意圖なきものと推斷し平津地方に在りし軍隊を續々熱河省内に侵入せしめ以て我が軍の銳鋒を制せんと企てた、また、一部の軍隊は日本軍と關内に誘致し以て列國の干渉を惹

海軍の協力

起せしめんとする苦肉策を企つるものありとさへ傳へられた。

其の情勢の下に第二遣外艦隊は關東軍と呼應し山海關及秦皇島方面は全勢力を集中し以て萬一に備ふるところがあつた、二月二十一日以後三月初頭に互り當方面に活動した、艦船並に二月二十八日に於ける所在地は左の如くである。



軍令部歴史編纂部編纂(花崎勲)

萩(驅)逐艦長

大尉 岩瀬 奥市

薄(驅)逐艦長

大尉 野間口 兼知

秦皇島 萬(驅)逐艦長

少佐 小山 猛男

芙蓉(驅)逐艦長

少佐 山田 雄二

朝顔(驅)逐艦長

少佐 中津 成基

其此の間第二遣外艦隊の各艦は凜烈なる暴風、險悪なる天候に於て流水と戦ひ、困苦缺乏に耐へ晝夜の別無く異常の緊張を以て支那側の態度を監視し支那軍の行動を監視しつつあつたが、我が第二遣外艦隊の集中及行動は以て支那側に異常の衝動と脅威とを與へ遂にその不逞の企圖を放棄せしめ、戦はずして之を制壓し、支那官憲をして華北一帯に於ける邦人の生命財産保護に相當の誠意を示し

幸にして一の對邦人不法事件の發生を見なかつたのは我が海軍の絶大なる威壓の然らしめたものであると信ぜらるる。

熱河肅清戦に次で蒋介石軍に對して行はれた陸軍の關内進出の軍事行動に際しては、之に協力する爲第二遣外艦隊は白河口方面に集中して敵を牽制し萬一に備ふるところがあつたが、幸にして實力行使に出づるの必要もなくして諸事順當に進捗し遂に五月末に至つて停戦協定成立し戦雲は收まつた。

其の後四月十日附を以て旅順に旅順要港部設置せられ、次で同月二十日附を以て要港部司令官に補せられたる津田（静枝）少將は昭和八年七月四日東京驛頭に凱旋し、

元第二遣外  
艦隊司令官  
の凱旋

午前十一時参内して 天皇陛下に拜謁仰付られ、具さに  
軍狀を奏上し 陛下より特に優渥なる御言葉を賜はつた。

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）